

# 道徳教育における崇高さに関する一考察

## — 宗教的情操の観点から —

東風 安生

- §1. 問題の所在
- §2. 本研究のねらい
- §3. 現在までの宗教的情操の教育のながれ
- §4. タウマゼインと宗教的情操の対象について
- §5. カントの言う「暴走する理性」について
- §6. 美学における「崇高さ」について
- §7. 宗教的情操における神を設けない理解のメカニズムについて
- §8. まとめ—道徳教育における「感動、畏敬の念」について
- §9. 今後の課題

### 梗概

カントの言う第1～4アンチノミーとして挙げられた神や不死、宇宙などの自然、そして因果律の中で最初の原因性などについて私たちが考えた場合、理性によって考えることができないような苦を感じる。古代ギリシア時代のタウマゼインの状況を指す構造は、感性や悟性で届かないものに対して理性が働きだすメカニズムである。理性に対してあらためて尊敬の気持ちが起こるような内なる状態は、「崇高さ」という言葉で安定するのである。人間の力で考えられない領域にある絶対の未知性に対する尊敬の気持ちが、この「崇高さ」という言葉に表出している。すると、現実界の空間や時間などの領域での直観である感性や、そこに知識を加えた悟性を超えた「何か」が、「崇高さ」である。これまでは、この部分を「人間の力を超えたもの」と学習指導要領では説明していた。「期待される人間像」では、宗教的情操としていた。現行でも、人間の力を超えたものに対して、畏敬の念を深めることをねらいとしている。人間を超えたものとなれば、自然や神に行きついてしまう。神に対して畏れ敬えと言っていることにどうしてもつながってしまう。そこにタウマゼインというとらえ方を用いることで、神や宇宙の果てのような具体的な何かを示めさなくてもよくなる。人間の悟性では考えが及ばないものとして区別した時点で、それ以上のことは未知なもので、絶対であるということになる。「神の存在があるかどうか」という答えのない問いは、払拭される。日本の道徳教育において、宗教的情操の教育は、「崇高さ」を育てる教育として位置付けることができる。宗教の知識については、宗教知識教

育であり、社会科が担当する。一方、各宗教団体が、宗派教育を実施することができる。残った宗教的情操教育は、カントの言う理性で解決のできない絶対の未知性として、道德教育において「崇高さの教育」として実施することで解決できる。

キーワード：宗教的情操、タウマゼイン、暴走する理性、崇高さ

## 第1章 問題の所在

広瀬悠三（2015）<sup>(1)</sup> は日本道德教育学会『道德と教育』に論文を投稿し「道德教育における宗教」で、Immanuel Kant（以下、カント）が道德教育と宗教教育の関係性について、以下のように論及していると指摘している。第一に、いかなる宗教教育にも、道德教育は先行しなくてはならないこと。神の声が聞こえるのはまず道德的実践をいかにするか問いかけがあったときである。その道德的課題に直面しない限りには、いつも神の声がさまざま頭の中をこだましているわけではないという。だからこそ、宗教よりも道德が必ず先行するのであり、神が存在するのだから「道德心をもて」とか「道德的行為をしなさい」というような因果関係ではない点を理解できた。

第二に、『実践理性批判』には「物自体そのものの本性の理論からではなく、我々の固有の理性が権威をもって命ずる道德法則から神の概念は生ずるのであり、実践的な純粋理性が神の概念を自分でつくるようにわれわれに強いるのである。」(Ⅷ 401)<sup>(2)</sup> いつの時代にも理性の声や道德法則を命ずる側の最高善に神が位置するなど、西洋哲学から発生する道德教育においては、こうした神の存在を抜きにしては考えることができない。日本において道德教育を考える場合、こうした人間が思考する際の置かれた環境の違いを十分に配慮する必要がある。

確かに、古代中国の孔子はキリスト教の影響を強く受けていないこともあり、自らの経験を大切に、こうした神や霊といった存在を自分たちが思考していくには、その領域に立つことができないから、考えることはしないと論語で説明<sup>(3)</sup>している。しかし、キリスト教が深く影響している近代西洋の社会では、全く神の存在をぬきにして道德の基本である哲学を考えることはできない。だからこそ、道德教育を考える場合にも少なからず、道德的価値を考えたり、道德的実践を追究して言ったりする場合に、神の存在なり神の意志などという発想を消し去ることはできないのだろうと推察される。

そこで、相対的にキリスト教の影響が小さい日本において、道德教育において宗教的情操に関する道德的価値を考えていく場合には、単純に宗教的情操をキリスト教の神による道德法則などと置き換えることはできない。しかし、キリスト教を信じることのない日本人においてさえ、宗教的情操は生じている。そもそも、キリスト教でないからと言って、神や仏を信じているわけでもない。無宗教という市民が日本は多いのである。西欧に人々

からは批判的に受け止められているこの無宗教という人々にあっても、なぜ宗教的情操は生じるのであろうか。また、なぜ道德教育においては、こうした宗教的情操を高める教育が求められているのだろうか。

## 第2章 本研究のねらい

宗教的情操の育成は、日本の憲法の下でも可能である。しかし、西洋からの教育哲学の観点から見ると、キリスト教の影響を受けその基盤において考えた道德教育と宗教の関係性は、日本においては理解しにくい部分がある。日本の道德教育において、宗教的情操を理解し、児童生徒の道德性を高めていく場合に、どのように定義して指導していくのかを、芸術に関する哲学である美学を切り口にして考えてみたい。

カントは『美と崇高の感情性に関する研究』<sup>(4)</sup>の中で、崇高の視点から美学をテーマとして論じている。美しさの基盤である「美」というものとその上位に位置するものとして「崇高さ」を取り上げている。18世紀の西欧を見ていくと、この「崇高さ」が「美」を超えて、大きな価値となっている。「崇高さ」を理解することで、キリスト教をはじめとする「神」という言葉に、なぜ人々が行き着いたのかが見えてくる。このメカニズムを解明することで、キリスト教や仏教などの宗教の側面だけでなく、「崇高さ」の面から道德的価値としての感動する心や畏敬の念、宗教的情操などの育成を具体的に指導できることの可能性を明らかにしたい。

## 第3章 現在までの宗教的情操の教育のながれ

### (1) 法律等に見る宗教的情操の教育

学校における宗教教育について日本国憲法や教育基本<sup>(5)</sup>で位置づけられている。

憲法 第二十条（信教の自由）

三 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

教育基本法 第十五条（宗教教育）

二 国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

このように、憲法で国やその機関は宗教教育をしてはならないとしているが、教育基本法で見ると、国公立の学校で「特定の宗教」のための宗教教育は禁止されている。

その一方で、学習指導要領総則<sup>(6)</sup>第1章第1の2において、「道德教育を進めるに当た

っては、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし（後略）主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること」と示されている。「生命に対する畏敬の念を育む」こととして「生命のかけがえのなさに気付き、生命あるものを慈しみ、畏れ、敬い、尊ぶことを意味する」としている。また、「このことにより人間は、生命の尊さや生きることのすばらしさの自覚を深めることができる」ともしている。また、「生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培う」ことによって、「人間の生命があらゆる生命との関係や調和の中で存在し生かされていることを自覚できる」としている。さらに、「生命あるもの全てに対する感謝の心や思いやりの心を育み、より深く自己を見つめながら、人間としての在り方や生き方の自覚を深めていくことができる」と示している。以上からみると、宗教的情操の教育は、宗教的体験をふりかえらせることであれば、これは宗教教育として憲法に抵触するために、教えることはできないと言える。その一方では、宗教的な心（宗教的情操）は誰の胸の内にも培われていくものであって、ある意味で道徳性のひとつであるにとらえることができよう。

## （2）戦後の教育改革の中での宗教的情操の教育

戦後、天野貞祐<sup>(7)</sup>は「宗教的心情」という言葉を用いて、宗教的情操の大切さを訴えている。また、天野は、『国民実践要領』の中で、宗教的情操の教育こそが、我々の人格と人間性を深めるものであるとしている。『国民実践要領』で天野が唱えた理論は、天野が委員をしていた中央教育審議会第一九特別委員会において出された『期待される人間像』の中に受け継がれたといえる。

1958（昭和33）年に道徳の時間が特設されたが、この「道徳の時間の設置に関する会議」でも、「宗教についての議論はほとんどなかった」と道徳の時間の設置に大きく関わった勝部真長は回想している。

高坂正顕<sup>(8)</sup>によって草案が執筆された『期待される人間像』は、それ以後の学習指導要領の内容に影響を与え続け、『国民実践要領』で天野が示した宗教的情操の定義がここで高坂にも受け継がれていく。戦後、「宗教的心情」として著した天野<sup>(9)</sup>の宗教的情操に対する思いは、京都学派の哲学者である高坂を中心にしてつながっていく。貝塚茂樹（2010）<sup>(10)</sup>は、戦前・戦後の宗教教育の歴史的な流れをつぶさに調査していくなかで、宗教的情操という言葉を用いるかどうかの視点から、その宗教的な情操の対象が何であるかについて、微妙に変化してきたことに注目している。またこの変化に国の施策的な変化を感じると言っている。貝塚は、「畏敬の念」という言葉の対象となるものが、当時の『期待される人間像』で使われていた「宗教的情操」の対象となるものとずれが発生していると言う。その理由として、「人間を愛する精神」に結び付けられ、『期待される人間像』で示された「永遠絶対的なもの」や「聖なるもの」といった宗教的な存在が想定されていな

いからであると、まとめている。

岩田文明 (2007)<sup>(11)</sup> は、宗教的情操に関して、高坂の『期待される人間像』と現在の学習指導要領とのあいだの断絶を指摘した。そして哲学的な分析から、「生命の根源」を人間の内的生命だととらえた。高坂の考え方の中で、対象化されないものに「畏敬の念」を求めていたのに対して、その後の学習指導要領は何らかの対象に「畏敬」を要請していたとしている。「特別の教科 道徳」の内容項目「感動・畏敬の念」では、よりよく生きようとする心やそれを追い求める姿勢をはじめ、芸術や自然も含めて「畏敬」の対象にして、小中学校の指導のつながりを考慮している。

## 第4章 タウマゼインと宗教的情操の対象について

### (1) タウマゼインについて

タウマゼインとは、ギリシア語で、プラトンやアリストテレスもよく用いた哲学の領域で使用される言葉である。意味は、「知的探求の始まりにある驚異」で、身近な日常の中にある細かな出来事の中に知的理解が及ばない点があると見つけ出したとき、人は自分の周囲のすべてが謎や困惑に包まれているような感覚を覚えてしまう。この時体験したこの驚異や驚愕の感覚を、タウマゼイン<sup>(12)</sup>と言う。

プラトンやアリストテレスは、哲学の起源となる知を愛することの起源は、驚きにあるとしている。「なぜなら、実はその驚異の情こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知の始まりはこれよりほかにはないのだ」(プラトン『テアイテトス』<sup>(13)</sup>より)「けだし、驚異することによって人間は、今日でもそうであるがああの場合にもあのように、知恵を愛求し(哲学し)始めたのである。」

こうした「驚異」は精神的な高揚を伴うと言われている。しかし同時にそれは、日常的な世界観の崩壊を予見させるような不気味さも兼ね備えている。だからこそ、人間は「驚異」と向き合い続けることは、時に「精神的な苦痛」を伴うのである。

この「精神的な苦痛」とは何か。身近な日常の中で、細かな出来事の中に、自分たちの知的な理解が及ばない点を見つけた場合に、人間は興奮を覚える。たとえば、キャンプに行き夜、ふと空を見上げたとき、そこに無数の星がまたたいていることに気がつく。「この星の輝きはいつどこからきたのだろうか。この宇宙はどこまで広がっているのだろうか。なぜ私はこの広い宇宙の中の地球という星にいるのか。この宇宙の外側にはまた別の世界があるのだろうか。」いくつもの問いが生まれてくるが、この問いに答えてくれることはない。そこに、無数の星の輝く宇宙に対する精神的な高揚の伴う「驚異」がある。一方で、この驚異には知的な理解をしようともどこまでいっても知的理解の及ばない問題を含んでいる。これが、「精神的な苦痛」を伴うという点に該当する。

## (2) カントとタウマゼイン

近代哲学を築いたカントは、古代から続く哲学的な命題であるところの究極の真理の追究であるところの、以下のようなものをすべてアンチノミーとして、人間の認識を超えているから答えはでないと『純粹理性批判』<sup>(14)</sup>で言っている。アンチノミーとは、二項対立の場合に相手側の論を否定することで自分自身の論が成立するだけでなく、自分自身の論の否定によって相手側の論が成立する、つまり両方の説とも答えられてしまい、決定できない状況を言う。次の四点は、どちらも相手を否定することで自分が成立できるものである。「宇宙は無限か、有限か」「物事の最終要素は存在するか否か」「自由の原因性はあるかどうか」「無条件で必然的な存在者はいるかどうか」

例えば、カントは、宇宙は無限か有限かについて宇宙全体を眺めくだすような視線は絶対に人間は持てないからとも付け加えて人間の思考を飛び越えているのである。だから、古代ギリシア時代から哲学で驚異とされてきた「精神的な苦痛」の要因になっているのである。そのためカント本人は、人間の知りえないものを現実界とは区別して、叡知界にあるものだとして、切り離している。

古代中国の孔子も弟子から、幽霊や神について尋ねられ、こうしたものを信じるかどうか問われたことがあると『論語』では記されている。そのとき、孔子は自分の思考の領域を超えているものについては、儒教でも考えないことにするとして、一切の教えの中に靈的なものやオカルト的なものを組み入れないようにしていた。

## 第5章 カントの言う「暴走する理性」について

カントの説く第1アンチノミーというもの（対立する二項がある場合、一方を否定して他方が成り立つ場合、逆に他方を否定するともう一方が成立するという関係）に「宇宙は無限か、有限か」という問いがある。こうしたアンチノミーは、「絶対に知りえない、絶対の未知性」であるとカントは言った。時間や空間の領域では、共有できる答えをつくることのできないものだからである。

これは、第2のアンチノミーである「物質を細かく刻んでいって細分化した場合に、最終要素はあるのかどうか」についても同様である。

さらに、第3アンチノミーにおける「因果律に従って出来事は発生しているのか、そこには原因の発端となる自由に選ばれた発生要因はあるのかどうか」についても同様である。不死なる魂についてでさえも、人間は、古代ギリシア時代から二千年以上にもわたってこの答えを探し続けていた。真理に向かってあくなき探究活動を続けていた。そしてカントは、その活動は人間の持って生まれた「理性」によるものであるとした。「理性」が暴走することで、なぜなのだろうという推論をくりかえししたとしても答えがでないような「問い」を生み出してしまう。

カントは「理性」について、一般的な知的な面とは別に三層構造の頂点の地位に立つものであり、推論する能力だとしている。(図1参照) この場合、三層の頂点にある理性において、推論する能力であり、この推論が暴走を始めて、人間が知りえない絶対の未知性までも求めようとし始める。それが4つのアンチノミーだとしている。感性や悟性においては、二層構造の認識能力を証明したカントは、その上にある理性については、因果律に支配されない自由もアンチノミーとして、人間の知りえない現実界にないものとした。

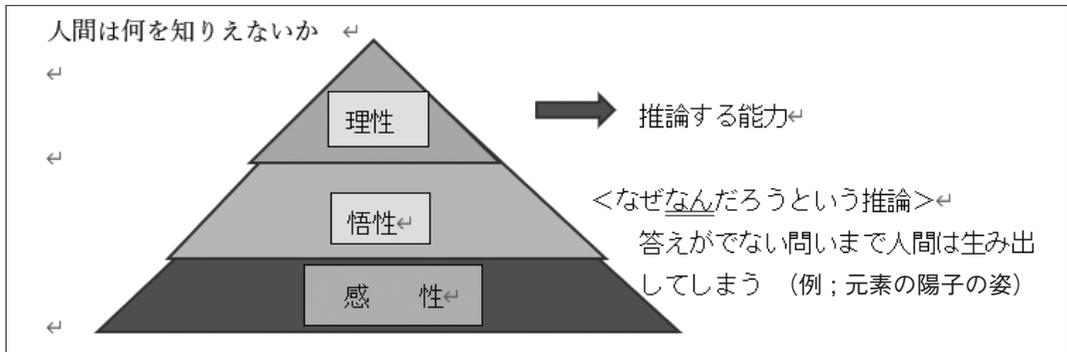


図1 理性・悟性・感性の三層構造図(筆者作)

## 第6章 美学における「崇高さ」について

### (1) 芸術からの「崇高さ」とは何か

カントの言う理性とは、推論するに能力であって、客観的なものばかりがその対象ではない。「自由」など道徳教育における内容項目についても、理性の世界に入ってくる。この理性の対象となるものが、実は答えの出ないものも多く含まれている。

カントはこれを叡知界にあるもので、現実界のものではないとした。理性でとらえる自然については、人間の空間と時間の領域で考えることができるが、宇宙や神、生命と言ったものは、人間の思考の範囲を超えている。いくら人間が知識を結集して理解しようとしても、いくら直観の力の強い人に見てもらったとしても、カントの言う悟性や感性だけでは及ばない。結局は理性を使うことができない。理性を使うことができる対象とできない対象がある。

星野太 (2017)<sup>(15)</sup> は理性によってとらえられる対象とできない対象について「崇高さ」という概念から説明を試みている。「崇高さ」という言葉は、理想や精神、犠牲などのワードに形容詞として用いられることが多い。日本国憲法では前文に「崇高な理想」という言葉が二度登場している。意味は、大きく分けて二つある。

一つは「道徳的なニュアンスでの高さ」、つまり「高い道徳的価値」であり、二つめは「世俗的な利得を離れた高邁な理想、気高い精神」を指している。ギリシア語では、

“hypsos”という高さや頂上を示し、ラテン語では“sublimis”という闊や敷居を超えるという意味がある。類似語には「壮美」がある。

こうした「崇高さ」の意味するところは、カントの言う推測能力を人間が悟性や感性を手段として用いる場合には、自分の理性を超えてところを指している。自分自身の考えの及ばないところに位置づくものが、「崇高なもの」である。芸術で言えば、「崇高なもの」は「理性」ではどうしようもない領域の対象を指す。だから、人間はこうした対象に出会うと逆に、自らの理性を意識して、その理性の偉大さを自覚するようになる。感性的な尺度を圧倒的に超えるすさまじさが、「崇高さ」をもたらす。

結論として言うと、「崇高さ」とは、カントの言う感性と悟性の両者を用いても把握できず、理性の世界でも推論不可能なことを指す言葉であると言える。

## (2) 学校現場における「崇高さ」の指導の実際

筆者<sup>(16)</sup>は、宗教的情操は道徳教育において公教育における宗教に対する制限があるため、道徳的情操というとらえかたで、宗教的情操だけでなく、文学的情操や人間の力を超えたものに対する情操、自然的な情操、音楽的な情操、美術的な情操、人の在り方生き方や心の美しさに関する情操などがあると発表した。

今後も道徳教育においては積極的に学習指導要領に示された「特別の教科 道徳」の内容項目・視点Dに関わる「感動、畏敬の念」を指導していかなくてはならない。しかし、安心して教師が公教育においてこの内容項目をねらいとする道徳科の授業を進めるためには、宗教的情操の教育に関する課題を解決していかなくてはならない。未履修だったり、指導がしにくかったりするために、形骸化した道徳科授業とならないようにしなければならない。

2020年度の日本道徳教育学会神川支部の第2回オンライン道徳フォーラムで発表された岩手県盛岡市立厨川中学校の及川仁美先生の発表では、道徳科の指導における内容項目で何が指導しにくいかと先生方アンケートを実施したそうである。回答結果の上位5位までに「感動・畏敬の念」が入っている。一位は、ひとり親家庭が増えてきている現状から「家族愛」だそうだが、こちらはねらいとする中身を指導者が理解しにくい点が大いとのことである。

## 第7章 宗教的情操における神を設けない理解のメカニズムについて

現行の中学校学習指導要領「特別の教科 道徳」解説編では、「感動、畏敬の念」の内容項目を次のように示している。「美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」としている。またこの内容項目についての説明では、「美しいものや崇高なもの、人間の力を超えたものとの関わりにおいて、それ

らに感動する心や畏敬の念を持つことに関する内容項目である」としている。ここで、整理しておくべきことは、美しいものと気高いものが並立されていること。人間の力を超えたものには畏敬の念であるにもかかわらず、美的なものや気高いものは感動する心だということ。この2点である。

人間の力を超えたものは何をさすのだろうか。子どもたちに「神」という言葉を教えなくても、世界中の国教が定められた国民は誰もが「God」と答えるだろう。しかし、我が国は信教の自由を憲法で定め、教育基本法や学校教育法において教育における特定の宗教教育は行うことができない。ここに矛盾が生まれる余地がある。人間の力を超えたものと学習指導要領で、指導する内容項目に挙げている一方で、神について指導することができない。人間の力を超えたものというものに畏敬の念を深めるようにすることが中学生の視点Dの21番目の項目のねらいである。教師が指導しにくいという理由には、こうした矛盾点について指導者はどのように解釈をして、生徒の心を育てていくか悩んでいるという点も実はあるのではないだろうか。

そこで、本論文は、人間の力を超えたものについて、カントの『純粹理性批判』を基盤に、人間の悟性ではとらえられないものを人間の力を超えたものとして位置付け、それでも人間は推論する能力（理性）を持っていて、どうしてもこの点を知ろうとしていることを明らかにしている。つまり、人間は第1～4のアンチノミーについては、人間の認識を超えているから答えはでないのであって、人間が感性でとらえられる時間や空間の領域で共有できる答えをつくることができないとしている。

カントは具体的には「宇宙」「物質の最終要素」「因果律か自由か」「無条件で必然的な存在者」は二層構造の認識能力を超えているという。

しかしこの能力を超えている部分に対して絶対に知りえない絶対の未知性として、古代ギリシア時代から答えを探し続けてきたものだが、これは別の世界（叡知界）のものであり、現実界とは別に仕分けている。この叡知界からの理性の対象となるものに対しては、カントは『判断力批判』で、暴力的な不一致と言う。例えば、巨大な聖堂やピラミッドを前にするとき（感性）、推論する能力はその真の姿（理性）を適切な仕方でも頭に思い描くことができず、それゆえに苦を感じるのだと、星野<sup>(17)</sup>は説明を加える。

一方で、『美と崇高の感情に関する観察』(1764)でカントや、『崇高と美の観念の起源』(1757)のエドモンド・バーク<sup>(18)</sup>は、消極的な快に対して、理性を用いなくても、感性と物事を理解する悟性によって想像することができるものが、「美」であるとしている。例えば、星野は、美しい花を眺めるとき、その咲き誇る花が目を通して体に入ってくる。これが感性で受け取る部分だが、それを悟性によって「これは桜の花である」と認識する。この二層構造の認識能力であり、そのあとに美しい花が桜であり、桜の花はやはり美しいとなる。推論能力では、おそらく桜は美しいだろうと推理していたが、そのとおりになる。これについて、感性と悟性による想像が、理性による推論能力で予測したことと一

致する。ここに「積極的な快」が生まれると言う。

結局のところ、ピラミッドだけでなくカントの言う第1～4アンチノミーとして挙げられた神や不死、宇宙などの自然、そして因果律の中で最初の原因性などについて考えた場合に、理性によって考えることができないような苦を感じる、古代ギリシア時代のタウマゼインの状況を指す構造は、「崇高」のメカニズムになっている。つまり、感性や悟性で用いて理性が働きだす場合に、この理性に対してあらためて尊敬の気持ちが起こるような内なる尊敬の念は、「崇高さ」という言葉で安定するのである。人間の力で考えることのできない領域にある絶対の未知性に対する尊敬の気持ちが、この「崇高さ」という言葉には表出しているのである。

## 第8章 まとめ — 道徳教育における「感動、畏敬の念」について

以上からすると、現実界の空間や時間などの領域での直観である感性や、そこに知識を加える悟性を超えた「何か」こそが、「崇高さ」である。これまでは、この部分を人間の力を超えたものと学習指導要領で称していた。期待される人間像のあたりでは、宗教的情操としていた。現行でも、人間の力を超えたものに対して、畏敬の念を深めることをねらいとしている。人間を超えたものとなれば、自然や神に行きついてしまう。神に対して畏れ敬えと言っていることにどうしてもつながってしまう。

この解決論として提案したいのが、このタウマゼインである。

人間の理性を超えた、人間の感性と悟性で考えることができない部分について、それを畏れ敬う気持ちを持つのは必然だと、カントは言っている。こうなると、神や宇宙の果てのような具体的な何かをしめさなくても、人間の悟性では考えが及ばないものとして区別した時点で、それ以上のことは未知なものが絶対であるということになる。「神の存在があるかどうか」という答えのない問いは、払拭される。宗教教育との課題も、これにより大きな節目を迎えることができる。

宗教的情操の教育は、「崇高さ」を育てる教育として日本では位置付けることができるだろう。宗教の知識については、宗教知識教育であり、社会科が担当する。一方、各宗教団体が、宗派教育を実施することができる。残った宗教的情操教育は、カントの言う理性で解決のできない絶対の未知性として、「崇高さの教育」とすることで解決できる。

## 第9章 今後の課題

宗教的情操の教育の解決には、「崇高さ」という言葉を用いて、一旦人間の理解の外側にこうした絶対の未知性をもった対象を置くことで、そこに向けて人間はどうしても憧れと理性による推論に惹かれていく特性があるとして考えていくよう、広く学校教育におい

でも伝えていきたい。これは現行の学習指導要領の規定を変えることではない。現行の解説には、宗教的情操の教育について触れてはいない。しかし、米国でも英国でもそうだが、道徳教育と宗教教育の関係性を国際的に仕分けをして考えるためには、古くは古代ギリシア時代から、そして近代のカント哲学においても「崇高さ」を用いて、人間の理解の範疇からあらためて外側にあるものであると位置づけたうえでの教育として主張していく必要性を感じている。

## 註

- 1) 広瀬悠三 (2015)「道徳教育における宗教-カントの道徳教育論の基底を問う試み」『道徳と教育』第333号、日本道徳教育学会。
- 2) カント『純粋理性批判』光文社古典新訳文庫、電子書籍。
- 3) 孔子 (2002)『論語』、金谷治 訳／注、岩波文庫。
- 4) カント (1764)『美と崇高との感情性に関する観察』(1988)、上野直昭訳、岩波文庫。
- 5) 姉崎洋一／荒牧重人／小川正人他 (2019)『解説 教育六法』、三省堂。
- 6) 文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領 (平29年告示) 解説 総則編』、東山書房。
- 7) 天野貞祐 (1958)「国民実践要領」(2015)『文献資料集成 日本道徳教育論争史Ⅲ期戦後道徳教育の停滞と再生Ⅱ。「修身科」復活と「国民実践要領』』、日本図書センター。
- 8) 山田真由美 (2015)「高坂正顕における超越と人間の問題 - 『生命の根源に対する畏敬』についての考察」『道徳と教育』、第333号、日本道徳教育学会。
- 9) 天野貞祐 (1980)『「純粋理性批判」について』、講談社学術文庫。
- 10) 貝塚茂樹 (2010)「戦後の道徳教育における『宗教的情操』と『生命に対する畏敬の念』の検討」日本道徳教育学会第七五回 (平成二二年度春季) 発表資料より。
- 11) 岩田文明 (2007)「道徳教育における<宗教性>」国際宗教研究所編『現代宗教2007-宗教教育の地平』、秋山書店。
- 12) 岩田靖夫 (2001)『ギリシア思想入門』、東京大学出版会。
- 13) プラトン (1967)『テアイテトス』田中美智太郎訳、岩波文庫。
- 14) 西研 (2018)『100分de名著 カント 純粋理性批判』、NHK出版。
- 15) 星野太講演「崇高とは何か -カント『判断力批判』から考える」、2018年度「西田幾多郎哲学講座 第8回」(2020年2月8日)、西田幾多郎記念哲学館。
- 16) 東風安生 (2018)『寛容を基盤においた生命尊重の教育に関する研究』、富山房インターナショナル。
- 17) 星野太 (2017)『崇高の修辞学』、月曜社。
- 18) エドモンド・バーク (1757)『崇高と美の観念の起現源』(1988)、みすず書房。